

特集・隨想「忘れ得ぬ労使の人々」第21話

「凜々しく格好のいい経営者」 小林宏 ライオン会長

船が日本の領海を離れ東シナ海に入ると晴天無風でもうねりが高く“天気晴朗なれど波高し”大型客船でも揺れを感じる。

日本生産性本部は創立15周年記念事業として、1971年に洋上研修「生産性の船」を立ち上げ、以来毎年東南アジア諸国へ派遣してきた。

当時日本にはまだ本格的なクルーズ船が就航していなかったので、イギリス国籍の客船「コーラル・プリンセス号」を傭船した。同船はアマゾン河を上り下りしていた河船である。河船の難点は喫水線が浅く海では揺れることである。本船は横揺れを防ぐためにスタビライザーという飛行機の翼のようなものを水中に出して揺れを抑える仕組みを備えていたがそれでも揺れを感じた。洋上研修の欠点は船が大揺れすると研修生は船酔いでダウンしてしまい研修どころではなくなることである。

本船が東シナ海に入って間もなく、風が強まり海が荒れた。教室へ行くと50人のうち5人しかいない。ほとんどの人が船酔いでダウンしてしまったのである。5人では研修にならないので仕方なく休校とした。私は沖釣りが趣味でこれまで一度も船酔いをしたことなく船の揺れにはめっぽう強い。

コーラル・プリンセス号は、船長以下高級船員はすべてイギリス人であるが、その他の乗組員は中国人である。朝食には必ず卵が出る。座るやすぐに耳元で「やきなま」と聞かれる。卵は生がいいか？それとも目玉焼きにするか？というのであるが、最初は何を問われているのか判らず面食らった。「ヤキナマ」のイントネーションにおかしさを感じ物まねする者まであらわれ”ヤキナマ“は一時はやり言葉となつた。



太平洋上の左小林宏団長

ライオン油脂とライオン歯磨の両社が合併し新社名はライオンとなった。今般の「生産性の船」の団長は小林宏ライオン会長である。私はインストラクターの役割で研修生50人受け持っていた。

休校したので所在なくロビーにたむろしていると小林団長がやって来たので挨拶をした。小林団長とは名刺交換をしただけでまだ親しくもないが団長は私の横に座り、ニコニコしながら「出航後初めて揺れていますね。大きな声では言えないが揺れない船はつまらないですね。もっと揺れないかなと願っていましたよ。揺れないといふ船に乗ったという気がしないのです」遠慮のないかなり大きな声である。



船内パーティーの小林団長（左）

皆が船酔いで苦しんでいるのに、この人は何ということを言うのかと思わず団長の顔を睨みつけた。

団長は黙してキッとした表情を見てか「いやごめんなさい皆さん苦しんでいるのに・・」と詫びた。誰もいないロビーでしばらく雑談を交わした。

団長は問わず語りに自分はかつて日本海軍の海軍士官であった。子供の頃から船が大好きで、今般もぜひ乗船したかったので団長を引き受けたというのである。

1時間も話しただろうか、最初は不遜な人だと思ったが話をしているうちに、なんだかいい人に思えてきた。

日がたつにつれ、偉ぶらず気さくな団長の人気はうなぎ登りで、あちらからもこちらからもアフターファイブの小宴会への誘いが目白押しとなつた。ご本人も喜んで気さくに出向いていくので、誰もが親しみを感じ団長の評判はすこぶるいい。

帰国して間もなく団長を引き受けていただいたお礼に生産性本部の役員が両国にあるライオン本社の小林会長のところへ伺つた。会長はロビーで睨みつけた私の表情がよほど気にかかっていたのか、名指しで「彼を遊びによこしてください」と伝言された。役員はご挨拶に行って来いと私を呼んで告げた。

生産性の船の総括責任者を務めた同僚の松尾博久を誘ってライオン本社へ挨拶に出向いた。出迎えた小林会長は顔を合わせるや存分に船旅を楽しみいい思いをさせてもらいましたと言いながら、壁に飾つて

ある真白な海軍士官の制服をまとった若き日の写真を持ってきて話しこんだ。

写真の会長は目が鋭く顔も引き締まりなかなかの好男子である。そして真っ白な海軍士官の正装がよく似合っていた。



中ライオン小林宏会長と右松尾博久総括

2週間に及ぶ船上生活を一緒に、既に遠慮の垣根が取れていますので「恰好いい写真ですね。会長は今もモテますでしょう？」と問うと「モテるよ、しかし私がもてているのか、当社のテレビコマーシャルに出演した

いのか・・・本命はコマーシャルに起用してほしいのだろうなあ」と言いながら、これまで食事を一緒にした人気女優の名を何人かあげた。羨ましく聞きながらつい長居をしてしまい、秘書がお茶のお代わりを持ってきた。

会長からある時面白い話を聞いた。真か嘘か判らぬがライオンではある島に実験用にゴキブリを飼育しているそうだ。ゴキブリの油は科学的にはこれ以上ない純粋な優れた油なので将来のために目下研究中だというのである。会長はロマンチックで時々夢見る話をするので口を挟まず黙って聞いた。

乗船中は3食同じテーブルで食事をしたし、下船してからもご馳走になったが、魚は刺身以外には一切手を付けないことに気が付いた。

美味しいものを食べに行こうと誘われ日本料理屋へ一緒した。失礼かなと思いつつ何故魚を食べないのか？嫌いなのかと尋ねたことがある。「ウン。どうもね」と返事が返ってきた。

そして小声で私に煮魚を食べてくれというや、仲居さんが席を外したすきに私の平らげ空となった皿と手を付けてない自分の皿を取り換えたのである。

気になるので再度「魚は嫌いですか？」と問うと仕方なさそうに「食べたいさ、でも魚には骨があるだろう？誰か取ってくれなくては食べられないよ」と小声で言うのである。「会長何をいっているのですか！子供の時にどんな躾をされたのですか？」「いや面白い。恥ずかしい話だが家人が骨をきれいにってくれたし、骨を取ってない魚は喉に骨が刺さるので外では魚は食べると言われたのだよ。それがトラウマとなってこの年になっても骨が怖くて外では魚は刺身以外手を出さないのだ」。話を聞きながら今時こんな方もいるのかと驚いたものである。

ある時小説の話になり私は乱読ながら本が大好きで、本を手から離したことがないというと会長は書棚から分厚い本を取り出しながら「あなたは“ほほづえ”を知っているか」と尋ねられたので、「名前は耳にしているが実物は知りません」と応えると、これが実物だよと手渡された。

“ほほづえ”は、企業経営者の書いた詩や紀行文、エッセイなどを編集し、四季ごとに出版する財界文芸誌である。ページをめくると知った方の文面が目に留まり何やら新しい発見をしたような心地となつた。

しばらくして自宅に小包が届いた。開けるとほほづえが何冊か出てきた。ライオンの会長秘書に電話をして確かめると、読み終わったものは宮崎さんに渡すよう申し付かりましたというのである。以来随分長い間送って頂き楽しんだ。あの文芸誌は今も続いているのだろうかと遠い昔を懐かしんだ。

ある時ライオン本社を訪れ仕事が片付いたので、小林会長が在席ならご挨拶をしようと思い担当の方に尋ねた。すぐに秘書が迎えに来てどうぞという。

挨拶を終え別れ際に何気なしに、今般欧州へ出張を命じられたが、帰国途中モスクワとレニングラード（現サンクトペテルブルグ）へ立ち寄る予定だというと、会長はびっくりして「私は先週モスクワから帰国したばかりだ」というのである。

にわかに話が盛り上がり、上げた腰をまた下ろし長居をしてしまった。お詫びをしながら立ち上がると「宮崎さんソ連へ行ったらどんなことを感じても決して悪口はいわないようにな。盗聴されていますから・・・」と真顔でアドバイスをしてくれた。今時スパイ小説じゃあるまいし、それに私は盗聴されるような大物ではありませんよと心の中で呟いた。

後日モスクワのホテルで同行の知人の部屋に電話すると明らかに誰かが聞いている気配がした。市内にある公衆電話は全て無料である。しばらくボックスの傍にたたずんでみたが誰も利用する人はいなかった。

空港に到着すると要所には兵隊が銃を構えて警備している日本では全く見たことのない光景で緊張を強いられた。そして小林会長の忠告はおそらく本当のことには違いないと感じた。

欧州とは異なる初めての社会主義国の旅を終え、鶴のマークのJALの機内に落ち着くと心底ほつとした。

小林会長のところへは時々お邪魔した。気さくで話題が豊富で面白く、人に全く緊張を与えず、引き止められるままにいつも長居をしてしまうのである。

毎回帰り際にはライオン製品をいっぱい袋詰めした手土産を頂いた。大きな袋の中に売り出し中の人気商品である育毛剤「ペントデカン」があった。以前先輩から「きみは禿げるタイプだね」と言われたことが気になり有難く利用したものである。お陰でこの年になっても薄くはなったが、同年配の皆さんよりましな頭髪が残っている。

ライオンと聞くと、今でも小林会長の海軍士官時代の真っ白な正装の写真が目に浮かぶ。小林宏会長は忘れがたい磊落で姿のいい経営者であった。